

1 得点分布及び小問ごとの正答率

〈表1〉得点分布

得点	650人	
	人数	%
100	0	0.0
90～99	8	1.2
80～89	59	9.1
70～79	128	19.7
60～69	163	25.1
50～59	133	20.5
40～49	93	14.3
30～39	43	6.6
20～29	20	3.1
10～19	3	0.5
1～9	0	0.0
0	0	0.0

*合格者の中から、無作為に抽出した650人(12.7%)の結果である。

〈表2〉小問別正答率(%)

大問	小問	正答率	
一	問一	㉠ 89.4	
		㉡ 87.8	
		㉢ 88.7	
	問二	A 79.8	
		B 91.1	
	問三	17.8	
	問四	82.8	
	問五	68.0	
	問六	46.3	
	二	問一	㉠ 83.4
㉡ 77.4			
㉢ 97.2			
問二		87.5	
問三		ア 38.9	
		イ・ウ 54.5	
問四		ア 68.5	
		イ 52.7	
問五		73.1	
問六		34.8	
三	問一	69.2	
	問二	68.5	
	問三	48.3	
	四	問一	56.4
		問二	12.5
問三		85.2	
問四	65.8		
問五	89.3		

〈表3〉

大問	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
一 文学的文章	69.6	66.5	70.2	54.6
二 説明的文章	53.7	54.2	56.8	57.0
三 融合(古典・表現)	38.8	46.9	52.0	52.2
四 言語事項	67.8	67.2	58.0	71.7

大問	平成23年度
一 文学的文章	61.1
二 説明的文章	59.6
三 活用	59.8
四 古典	60.8

2 分析結果の概要

〈表1〉について、70点以上の人数は全体の30.0%で、昨年度に比べ6.2ポイント上がった。40点未満の人数は全体の10.2%で、昨年度に比べ7.0ポイント下がった。平均点を中心として、ほぼ正規の分布状況である。

〈表2〉について、正答率80%以上の問題数は10問で、ほとんどが漢字の読み書きなど、言語事項に関する知識・理解を問う問題であった。正答率40%未満の問題数は4問で、すべて文章等の内容を読み取り、記述する問題であった。

今年度は、言語事項に関する知識・理解を、素材文等を通して問う形式としたが、正答率は高かった(一の問一、二の問一、問二、四の問五)。また、読むことの基礎的な力を問う問題も正答率が高かった(一の問二、四の問三)。一方で、思考力、判断力、表現力等を必要とする問題は正答率が低かった(一の問三、問六、二の問六、三の問三、四の問二)。

〈表3〉について、今年度は大問構成を改め、三は情報を活用する力等をみる問題、四は古典の表現や内容を理解する力等をみる問題としたが、大問ごとの正答率は、いずれも60%前後であった。

3 小問ごとの内容及びねらい

大問	小問	内容	出題のねらい	出題形式			評価の観点			
				記号選択	抜出	記述	話すこと 聞くこと	書くこと	読むこと	知識 理解
二	一	文学的文章	学校教育用の漢字を正しく書くことができる。			○				●
	二		文脈に即して適語（慣用句）を補充することができる。	○					●	●
	三		文章の展開に即して内容を的確にとらえ、説明することができる。			○		●	●	
	四		文章の展開に即して内容を的確にとらえることができる。	○					●	
	五		文章の展開に即して登場人物の心情をとらえることができる。	○					●	
	六		文脈に即して語句の意味の違いをとらえ、説明することができる。			○		●	●	
三	一	説明的文章	常用漢字を正しく読むことができる。			○				●
	二		助動詞の意味・用法を指摘することができる。	○						●
	三		文章の展開に即して内容を的確にとらえることができる。		○	○		●	●	
	四		文章の展開に即して内容を的確にとらえ、整理することができる。			○		●	●	
	五		文章の中で段落の果たす役割を指摘することができる。	○					●	
	六		文章の主旨をとらえ、情報を活用しながらまとめることができる。			○		●	●	
四	一	活用	文章の内容やグラフの特徴をとらえ、課題をまとめることができる。			○		●	●	
	二		話し合いにおける進行役が果たす役割を指摘することができる。	○			●			
	三		写真や文章の情報を活用しながら、条件を踏まえて発表原稿を書くことができる。			○		●	●	
四	一	古典	漢文を訓読のきまりに従って書き下すことができる。			○				●
	二		文章の展開に即して登場人物の行動や心情をとらえ、説明することができる。			○		●		
	三		歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めることができる。			○				●
	四		文章の展開に即して内容を的確にとらえることができる。	○					●	
	五		目的に応じて、文字の大きさや配置を指摘することができる。	○						●

4 標準解答及び考察



〈標準解答〉

問一	① 不思議	② 提案	③ 鳴
問二	A エ	B ア	
問三	(例) 自分の才能や、進むべき道を見つければよい		
問四	ウ		
問五	エ		
問六	(例) ③は、季節としての春を表しているが、⑤は、クラスの仲間と一緒に過ごす、充実したときを表している。		

〈ねらい〉

豊かな心を育てるという観点にも配慮し、文脈に即した内容の把握など、文学的文章を読むための基礎力や、登場人物の心情、表現の意味や特徴を、叙述に即して的確に理解し表現する力等をみる問題である。

〈考察〉

- ・ 正答率は、昨年度（54.6%）より高いものの、例年に比べると低い。
- ・ 漢字を正しく書く問一、文脈に即して慣用句を補充する問二、指示語の内容をとらえ、具体的な説明として適切なものを選択する問四の正答率が高い。
- ・ 会話文をもとに登場人物が伝えたかった内容をとらえ、記述して説明する問三の正答率は、17.8%とかなり低い。「いろんなことで変わっていきける」など、「自分の才能」や「進むべき道」に当たる具体的な説明が不足している解答や、「みんなで合唱を作り上げていこう」など、根拠に乏しい解答が目立ち、文脈に即して内容を把握する力が不十分である。
- ・ 文章中で繰り返される語（「春」）の、文脈における意味の違いを記述して説明する問六の正答率も、46.3%と低い。特に⑤の「春」が象徴する意味をとらえきれず、「もう春が来た」など、単なる季節としてとらえている解答や、「青春を表している」など、具体的な説明が不足している解答が目立った。

〈今後の指導〉

- ・ 生徒の読むことへの関心や意欲を高める学習課題を設定し、文章の表現を根拠に、生徒の多様な読みを引き出しながら、登場人物の言動や心情、思考の変化などについて検討・吟味する授業展開を工夫する。
- ・ 「読むこと」の指導だけでなく、「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の指導との関連を図り、読み取った内容について書いてまとめたり、話し合ったりするなど、生徒の表現する力の向上に結びつく授業場面を設定する。
- ・ 授業で扱った教材に関連する文章や本を紹介する、学校図書館等を活用して生徒の読書活動を積極的に促すなど、多様で良質な文章表現に触れさせる機会を増やす。



〈標準解答〉

問一	① おもむき	② おんけい	③ みりょう
問二	ウ		
問三	ア (例) 草の上の露に、しきりに風が吹きつける イ (白) 露 ウ 玉		
問四	ア (例) 音を立てずに飛ぶフクロウ (の羽根) イ (例) 騒音の防止に役立つパンタグラフ		
問五	イ		
問六	(例) ヒトは、古来、生物から多くのことを学び、それを生かしてきた。しかし、近年では、生物の絶滅が急速に進み、一年間に四万種が絶滅している。生物の絶滅は、生物が持つ膨大で貴重な情報を、永久に失わせる。生物多様性を保全し、活用していくために、私たちは、生物から様々な情報を読み取る感性と知性をもつべきである。		

〈ねらい〉

論理的な見方や考え方を養い、視野を広げるという観点にも配慮し、論理的文章を読むための基礎力や、文章の構成や展開をとらえる力、他の情報を生かしながら文章を要約する力等をみる問題である。

〈考察〉

- ・ 正答率は、例年よりやや高い。
- ・ 漢字を正しく読む問一、助動詞の意味・用法を指摘する問二の正答率は高い。
- ・ 引用された和歌の内容をとらえ、記述して説明する問三、具体例の内容を整理してまとめる問四、グラフの情報を活用しながら文章を要約する問六の正答率が低く、文章の内容を的確に読み取り、整理する力や、文章中の言葉を使ってまとめる力が不足している。
- ・ 問三のアでは、文章中にある「草におく露」「葉上の水玉」という表現をとらえきれず、「白露」が「葉の上にある」ことの説明が不足している解答が多かった。問三のイ・ウでは、「秋の野」を「玉」に見立てるなどの解答があり、「見立てる」という言葉の意味が理解できていない。
- ・ 問四では、「バイオミクリー」の内容が表の中で「機能＋具体物」の順に整理されている点に気づかず、「音を立てずに飛ぶ」（機能）と答えたものや、「パンタグラフが騒音を防止する」（具体物＋機能）と答えたものが多かった。
- ・ 問六では、文章の要旨のまとめに、「私は、～と思います」など、自分の考えを加えているもの、「筆者が述べたかったことは、～ではないかと思います」など、冗長な表現が含まれるもの、グラフの内容の説明に多くを費やし文章の要旨を端的にまとめられていないものなどが目立った。問いの条件に従って内容を整理し、まとまりのある文章を書く力に課題がみられる。

〈今後の指導〉

- ・ 段落ごとの詳細な読みだけでなく、文章全体の中で問題提起や結論にあたる部分を大きくとらえさせる授業展開を工夫する。
- ・ 説明的文章の中で使われる抽象的な概念を表す語句等に慣れさせ、設問の条件や字数制限に合わせたまとめ方を意識させる。
- ・ 平素から、比較的長めで論理性の高い文章を読ませ、文章の一部分または全体について、その要点をまとめさせる場を多く設けるとともに、根拠を明確にししながら自分の考えや意見を述べさせる。

目

〈標準解答〉

問一	(例) 学校のきまりに比べて、学校行事についての説明が、よく理解されていない
問二	エ
問三	(例) これは、全校生徒が地域の方々と一緒に、学校周辺の道路を清掃した、クリーン活動の様子です。ボランティア活動では、私たちも社会の一員として、地域に貢献しましょう。

〈ねらい〉

文章、グラフ、写真等の情報を活用して自分の考えを表現する力等をみる問題である。「話すこと・聞くこと」の指導の観点から、話し合いにおける進行役の役割についての理解もみている。

〈考察〉

- ・ 正答率は59.8%と、教科全体の平均に近い。
- ・ 問一、問二は、70%近くの正答率であるが、グラフから課題を読み取り、記述して説明する問一では、「学校のきまり」と「学校行事」を対比的にとらえていない解答が目立った。また、話し合いにおける進行役の役割を指摘する問二は、記号選択の出題形式としては正答率が低く、「話すこと・聞くこと」の基本的な力が十分定着しているとは言えない。
- ・ 問三は、写真Aと写真Bに関する情報の対応関係（「体育大会」に対して「ボランティア活動」、「騎馬戦」に対して「クリーン活動」等）がとらえきれず、一文目を「これは、～ボランティア活動の様子です」と記述している誤答例が最も多かった。また、二文構成ではなく、三文で書いている解答や、行事の具体的な説明の後、思いを伝えるという展開をとっていない解答も多く、問いの条件である「発表原稿①の構成や展開をふまえて」いない解答が目立った。情報を読み取り活用する力や、目的や意図に応じて書く力に課題がみられる。

〈今後の指導〉

- ・異なるテキストを読み比べ、その違いや共通点について話し合ったり、目的に応じて資料等から必要な情報を読み取ったりして、それを日常的・実用的な言語活動に生かす場面を設定する。
- ・明確なねらいのもとに、教師や生徒同士の対話や交流が生まれるような言語活動を授業の中に組み入れる。
- ・話し合いの場面では、課題の解決に向けてお互いの考えを生かし合い、話し合いが効果的に展開するような進行ができるよう指導する。

四

〈標準解答〉

問一	家書を作らんと欲して
問二	(例) 手紙に言い残しはないかと心配する気持ち。
問三	さしむかいたる
問四	ウ
問五	イ

〈ねらい〉

手紙を題材とした古典を通して、古典を読むための基礎力をみるとともに、古典の表現や内容を理解する力等をみる問題である。書写を日常生活に生かす観点から、はがきの表書きの書き方についての理解もみている。

〈考察〉

- ・正答率は60.8%と、教科全体の平均に近い。
- ・古文の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改める問三、はがきの表書きの文字の大きさや配列等を指摘する問五については、正答率が高い。
- ・漢文訓読の基本的なきまりを問う問一、漢詩の内容理解の力を問う問二の正答率が低い。問一では、「家欲して書作らんと」「家書を欲して作らんと」など、返り点に従って読むことができない解答が目立った。問二では、「はやく手紙を読みたいと思う気持ち」など、自分に届いた手紙ととらえた解答が多くあり、およそ5人に1人が無解答であった。古文の内容読解の力を問う問四も、記号選択の出題形式としては、正答率が低く、語注や部分訳を参考にしながら、古典の内容を的確にとらえる力が不足している。

〈今後の指導〉

- ・日頃から音読・朗読などを通して古典に親しませるとともに、古典を読み深めるためには、基本的な知識や技能が必要となることを、生徒に実感させるような授業展開の工夫をする。
- ・教科書にある語注や口語訳、鑑賞文などを参考にしながら、古典の内容を読み深め、その面白さについて互いの意見を述べ合う場面などを、授業の中に設定する。
- ・折に触れて古典や詩歌などのすぐれた作品を紹介したり、学校図書館等を活用しながら課題解決のための学習を行ったりして、言語文化に対する興味・関心を高め、日常の自己の言語生活を豊かにする意識をもたせる。